

おぐい



2004

3

NO.593

● 広報



シリーズ③②

★ かがやく
小国つ子 ★

かくれんぼ人形、できたあ～!!

今月の子ども愛ランドは、かくれんぼ人形づくり。

ぼくだけ、わたしだけの世界にひとつしかない人形。

出来栄えに満足げな様子が、

子どもたちの笑顔からも伝わってきます。



二十一世紀は、環境の時代といわれています。特に地球温暖化は、私たちみんなで考えなければいけない問題です。町では、今年度、環境省の二酸化炭素排出抑制対策普及啓発事業を導入して、「白い森の国おぐに」で実現可能な温暖化防止対策の研究に取り組んでいます。その一環として、二月十五日に、おぐに開発総合センターで、「まちづくりに活かそう、自然のエネルギー」をテーマに、「地球温暖化問題を考えるシンポジウムin白い森」を開催しました。そこで今月は、そのシンポジウムの様子を紹介します。

基調提言 身近にできる温暖化対策

二一〇〇年には海面が八センチ、平均気温は五・八度上昇すると予測

地球温暖化という言葉は、皆さんもご存知だと思います。小国町はブナ林に囲まれている、とても自然豊かなところだから、関係がないと思われる方もいるかもしれませんが、地球温暖化は、私たち一人ひとりに課せられた、身近で深刻な環境問題です。

温暖化というのは、ひとつの町でバランスがとれていればそれでいいというものでは

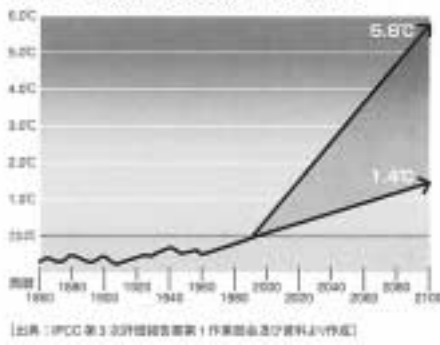
講師 青柳恵美子

環境省地球環境局地球温暖化対策課国民生活対策室主査

東京都生まれ。1985年に消費生活アドバイザー認定。イトーヨーカドー消費者室勤務等を経て、2002年7月末日より現職。民生(家庭)部門の温暖化対策に関する普及啓発を担当。



過去140年間と将来の気温上昇の予測



なく、世界全体でのバランスがとれないと、異常気象などの大変動が起きる原因となります。例えば、地球の温暖化が進むと、海面が上昇するといわれています。南極や北極の氷、世界各地にある氷河などが溶けて、その結果として海面が上昇するというものです。科学者の予測では、二一〇〇年には八八センチも海面が上昇するとされています。南の島では水没することが心配され、日本でも海岸線の砂浜がなくなり、海水浴ができなくなってしまうといわれています。

また、地球の平均気温が五・八度、約六度も上がってしまいます。みなさんも風邪をひいたとき、体温が一度上がったものつらいものです。それが六度も上がったら、小国町はもろろんのこと、地球全体の環境に大きな影響が現われることがわかんと思います。

温室効果ガスの功罪

地球温暖化の原因は、温室効果ガスの増加によるものです。私たちの住む地球は、二酸化炭素とかメタンという温室効果ガスに包まれているので、人間や生物が暮らせる温度になっています。温室効果ガスがないと、地表の気温がマイナス一八度となって、ほとんどの人間や生物が生きられない環境でなくなります。温室効果ガスの九割を占めるのが二酸化炭素です。産業革命以降、先進国は、石炭や石油を大量に使って電気を発電し、経済発展を遂げ、私たちは快適な生活を実現してきました。しかし、その結果、二酸化炭素の排出量が急激に増大して、地球温暖化問題を引き起こしたのです。



世界の二酸化炭素の国別排出量（二〇〇〇年度）をみると、アメリカが一位で二四・四％を占めています。次いで中国、ロシアが続く、日本は四位で、世界の排出量の五・二％を排出しています。では、どこからわが国の二酸化炭素が出ているかというと、二〇〇一年度では、産業部門が三七・二％、運輸部門が二二・〇％、業務その他部門が一五・五％、そして家庭部門が一・七％となっています。家庭部門が少ないようにみえますが、統計ではマイカーは運輸部門に入っていますから、マイカーやゴミなどを含めると、家庭部門は全体の

約二〇％にもなるとされています。

二〇一二年まで

二酸化炭素を

一一・二％削減

地球の温暖化問題は、日本だけでなく、世界の国々で危機意識が強くなりました。そこで、具体的な二酸化炭素の排出削減の数値目標を国際的に約束しました。「京都議定書」と呼ばれるものです。その日本の国際的約束は、二〇〇八年から二〇一二年の間に、一九九〇年の二酸化炭素排出量の六％を削減するというものです。

しかし、二〇〇一年度には一九九〇年に比べて五・二％増加してしまいました。六％減らすという国際的な約束なのに、減るところか五・二％も増えてしまったのが実態なのです。そのため、二〇〇八年から二〇一二年のあいだまでに、五・二％と六パーセントを足した一一・二％を減らすなくてはなりません。

一挙両得なエコライフ

未来の子どもたちに美しい地球と快適な環境を手渡していくために、私たち一人ひとりが、それぞれの暮らしのなかで二酸化炭素の排出抑制につながる行動をとっていく必要があります。そのためには、自分たちの暮らし方をちょっと立ち止まってもう一回見直し、無駄だなあというところを省いていきましょう。貴重なエネルギーですから、これを効率よく使っていく必要があります。

エネルギーというもの決してタダではありません。エネルギーを効率よく使うということは、二酸化炭素の排出削減にもつながりますし、わが家の財布も減らずにすむという、一挙両得なエコライフが実現できます。

例えば、自動車で次に買い換えるときには、ハイブリッドカーやアイドリングストップ自動車などをお勧めします。また、無駄な荷物の積みっぱなしはやめる、タイヤ

の空気圧を適正にするといった、エコドライブに役立つお得な使い方もあります。家電製品やガス調理機器などでは、省エネ・ラベル「eマーク」のついた製品をお勧めします。長時間つけっぱなしの場所の照明には電球型蛍光灯をつけるなど、身近なところからの取り組みが大切です。これらの情報は、環境省のホームページ (<http://www.wanokurashine.jp>) に載っていますのでご照会ください。

今日、ここに来る途中に、小玉川小中学校を見学させていただきましたが、そこに置いてあったクリーンヒーターに「省エネしよう」と張り紙がしてありました。子どもたちは省エネ、二酸化炭素抑制という意識で行動していますし、総合学習など学校でも温暖化問題に真剣に取り組んでいると思います。次代を担う子どもたちのためにも、私たち大人世代が、きちんとできることは取り組んでいきたいと思っています。

パネルディスカッション

まちづくりには活かそう、

自然のエネルギー

大塚 地球温暖化は、二十

一世紀の人類の重大な問題となりました。一人ひとりが、それぞれの生活や地域で取り組んでかなくてはならないと思います。人類は、一九五〇年には二十五億人でしたが、二〇〇〇年に六十二億人とな

りました。そして、二〇五〇

年には百億人に達すると予測されています。地球上のさまざまな地域でさまざまな人びとが共生していくためにも、対策が急がれます。そのひとつが、石油や石炭などの化石燃料に依存しない社会をつくっていく方向です。小澤さんから、地域の自然資源を活用した自然エネルギーの現在についてお話しいただきます。

コーディネーター 大塚 洋明

都市計画家、株式会社シー・ディー・アイ取締役

東京都生まれ。つくば科学技術博覧会基本計画など地域の文化拠点の構想・計画づくりに多数関わる。山形県県政アドバイザー（平成9～14年）



小澤 自然エネルギーのおお

もとは、太陽エネルギーからきています。地表では、1㎡あたりだいたい1キロワットというエネルギーが平均して注いでいます。それを例えば、太陽光発電とか太陽熱利用というかたちで直接利用できます。電池を使って電気をおこしたり、太陽熱を使えば、お湯を沸かしたり冷暖房に使用することもできます。



パネリスト
小澤 祥 司

〔 有限会社アースキッズ代表 〕

静岡県生まれ。環境学習プログラムやソフトウェアの制作のほか、自然エネルギーの普及、生態系の保全や復元、持続可能な地域づくりのための計画立案などに関わる。

太陽エネルギーが、別のエネルギーのかたちに変わったものを間接利用といいます。これには、風の力を利用する風力発電、そして、小国町に豊富にある植物のエネルギーを利用するバイオマス。このほか、波力、地中などの温度差利用、これには雪氷エネルギーも入ります。

実は、化石燃料も何億年か前の過去の太陽エネルギーなのです。これを生き物がせっ



国産ペレットストーブ

せと貯め込んだものを地下資源にしたものが、化石燃料なのです。石油も石炭も天然ガスも昔の生き物の名残で、昔の太陽エネルギーの缶詰なのです。それをいま、一生懸命、いっぺんにこじあけて空気中に放出しているわけです。

自然エネルギーの特性は、どこにでもあるということです。風力の豊富なところは風力が、水力の豊富なところは水力が、そして森林の豊かなところはバイオマスが、というようにどこにでもあります。そして太陽エネルギーに基づいていますから、賢い使い方、適正な使い方をしていく限り、再生可能ということです。

私は、自然エネルギーで大事なことは、我慢の環境ではなく、誰もが得する環境対策にすることだと思っています。得をする環境対策ということ、得をすれば、まだまだ夢があります。しかも、子孫に恨まれないですむということです。自然エネルギーが、次代の成長産業になるといふことを私は確信しています。

佐藤 小国町のように資源の豊かなところでは、エネルギーと食糧の自立と地産地消が必要だと思っています。私は酒田市出身ですからわかりますが、農山村にはエネルギーが豊富にあります。生きていくのに必要なものは、エネルギーです。食糧は人間にとってのエネルギーです。一般にエネルギーは、社会全体が維持されるために不可欠なものです。こうしたエネルギーになるものが豊富に農山村にはあります。その多くが、自然エネルギーと呼ばれるものです。こうした地域のエネルギーの資源を、地域の技術で開発

パネリスト
佐藤 由 美

〔 フリーライター 〕

山形県酒田市生まれ。主に環境問題や開発途上国の問題、自然エネルギーを中心に取材。著書に「自然エネルギーが地球を変える。一まちづくりの新しい風」などがある。



して、地域の人々がつくるそうしたことに、地域の農協などの金融機関や住民が投資して、地域経済をまわしていくことが、いま、閉塞感のある地方経済を突破していくカギになると思います。経済と環境とエネルギーを結びつけていくことが、自然エネルギーにおいても地域社会においても大事だと思います。小国町の豊富な森林は、夏に太陽エネルギーを貯めて成

長しますが、それを冬に自然エネルギーとして使います。そのとき、地元の製作所などの技術開発が大事です。よそから買ってくるだけでなく、地元の企業などと協力して機器の開発などにも取り組んでほしいと思います。デンマークは、風力で世界市場の半分を占めています。私が取材に行ったメーカーは、もとは地元の農機具メーカーでした。ペレット・ストーブメーカーは二代前は鍛冶屋でした。小国にもこうした企業や技術があると思いますので、環境にやさしいから新エネルギーを普及させようというだけでなく、地域の経済と結びついてほしいと思いますし、そうでないとなかなか長続きしないと思います。

金子 私は、北海道の美唄市という、ちょうど札幌市と旭川市の中間にあるところで、雪の冷熱エネルギーに取り組んでいます。美唄市は、かつて炭坑の町でしたが、現在の基幹産業は農業です。この基

パネリスト

金子 幸江

北海道美唄市経済部
産業振興室主事

新潟県十日町市生まれ。美唄市経済部産業振興室において、雪を活用した新たな産業おこしとしての雪氷冷熱エネルギーなどを担当。



幹産業である農業と、冬場のやっかいものの雪を結びつけて、新エネルギーとして利用できないかと取り組みが始まったのです。石炭は、かつて黒いダイヤと呼ばれていたもので、雪を白いダイヤ、白い冷熱エネルギーというようになりしました。

平成九年に取り組みが始まって、美唄自然エネルギー研究会というものをつくり、産・官・学の協力で始めました。美唄は、米の生産量は全

国八位、道内三位の産出を誇っていますが、泥炭のため質より量となっているのが現状です。そのため、夏にお金をかけて冷熱保存して出荷調整していたので、お米の価格にそうしたコストが上乗せされていったのです。そこで、雪を冬場に大量に貯蔵して、それを冷熱エネルギーとして利用するようになったのです。

これ以外にも、民間のマンションや個人住宅、老人福祉施設、介護老人保健施設、美唄市交流拠点施設ゆりりん館などにも雪冷房が導入されるようになってきました。おかげさまで、通産省環境・省エネルギー建築賞など、多数の表彰を受けました。現在では、市民の方が雪冷房などを設置する際に、国の補助が三分の一、市の補助が六分の一受けられ、市民の負担は半分です。む制度も整っております。

森田 私は、現在「菜の花畑から広がる環境づくり」というビデオを作っていますが、この企画をしたのは静岡県ト

パネリスト

森田 久雄

全国農村映画協会取締
役プロデューサー

北海道札幌市生まれ。食料・農業・環境に関する映像の演出・制作を担当。その他、全農安心システムなど農畜産物のマーケティングに携わる。



ラック協会というところですからわれわれも、環境のためのクリーンな対策をやっているという、流通関係者も動き出しているのです。県もバックアップしています。

菜種などから油を作り、自動車動かすバイオディーゼルは、日本では廃食油から燃料やせっけんを作る市民運動的なことからはじまりましたが、現在は、善意の市民運動から産業化のほうへ動き出しています。



当日は約150名の町民が聴講

ドイツのガソリンスタンドでは、普通のガソリンが三三三円、ハイオクが三三六円、スーパープラスのハイオクが一四一元、ディーゼルが一〇六円、バイオが九三円となっています。バイオ燃料を使う利用者に聞くと、安いからと答える人が多く、次が環境にいいからと答えます。つまり、きちんと市場として成立するような制度が整えられているからです。京都議定書により、

ドイツでもエコ税がかけられるようになりましたが、バイオ燃料は、税制上の優遇措置が認められているために、石油から精製するガソリンより安くなっているのです。

EU（欧州連合）では、これ以上食糧をつくってはいけないということになっており、農家が食用ではない菜種をつくり、それをきちんと燃料にするまでの過程が管理されています。菜種は食糧油より安

いですが、農家は、菜種を燃料に精製する事業に投資して配当を受けられ、農地が荒れずに維持できることから菜種の栽培に参加しています。日本でも、バイオ燃料の普及には、きちんと市場に受け入れられる制度と体制が整備されることが不可欠です。

小国町では、バイオなど、新エネルギーに住民が出資して、そのエネルギーに住民が納得して買うという循環

ができればいいと思います。東京などではどういうエネルギーを買うかということなどがわかりません。地域で、自分が納得してエネルギーを選択するという意識が醸成されるいいと思います。小さな国・小国から大きな情報発信がされることを望みます。

大塚 パネリストの方からさまざまご提言がありました。

小国町のような資源の豊富なところでは、地域の資源を活用した自然エネルギーには、大きな可能性があることがわかりました。小水力や森林資源を活用したバイオ、冬でも使える地中熱の温度差を活用した自然エネルギー、雪氷など、いろいろな活用方策が考えられると思います。

ところで、一九九九年に国連が世界の科学者を集めて、二十一世紀の人類の最大の問題はなんだろうと議論を交わしました。その結果、出された課題は、「世界の淡水不足」でした。人類は地球の温暖化とともに、水不足という問題

にも直面しているのです。人類が利用できる淡水は、地球の総水量の〇・五%にも満たないのです。そして、良い・悪いは別にして、水は貴重な「商品」になりつつあるのです。アラスカから中国へスーパータンカーで水を運ぶ計画がすでにあります。

このような時代に、豊かな水資源や自然資源は実に貴重なものとなっています。直接的な輸出商品となる水、豊かな自然資源を利用した豊富なエネルギー、そして、何より美しい環境と美味しい食と人々の温かいもてなしの心、小国町は、豊かな資源大国なのです。

小国町の白い森は、ブナ林の白、銀世界の白、そして、未来を描いていくキャンパスの白を表わしているそうですが、今日の話が未来を描くうえで大きな可能性を示唆できたら、これに過ぎる喜びはありません。パネリストのかたがたとともに、これからお手伝いさせていただきますと思っています。



町では、平成十三年度に文部科学省から小中高一貫教育の研究開発学校の指定を受け、三年間にわたり実践研究に取り組んできました。そこで今月は、これまでの成果等について教育委員会に取りまとめていただきました。

1 小学校からの特設教科

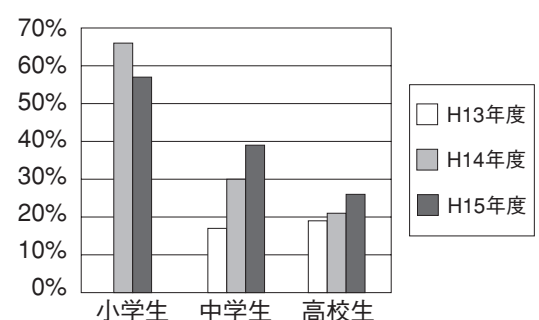
「国際・情報」の実施

① 子どもの興味関心、技能の高まり

小中高一貫教育の取り組みの特色の一つが、小学校からの特設教科の設定です。

これは、小国町独自の試みで、授業時間数を工夫しながら、小学校から高校まで一貫して「国際（英会話中心の学習）・情報（コンピュータの学習）」の授業を行ってきました。今年度行った子どもたちへのアンケートによると、この授業をとおして「英語が好きになった」と答えた子どもは、小学生五七％、中学生が三九％、高校生が二一％という結果でした。

英語が好きになった子ども



この三年間で、英語に関心を持ち、自分から話そうとする生徒が確実に増えてきました。また、小国高校の一年生では四七％の生徒が「英語が好きになった」と回答しており、一貫教育の成果であると考えています。

さらに、中学生の英語力をみると、三年間で学力標準テストの偏差値が五ポイント上昇するなど、学力向上にも着実につながっています。

一方、コンピュータを活用した情報の学習では、小学生で八七％、中学生で六六％、高校生で六〇％が好きになっ



ALT（外国語指導助手）との授業

たと答えています。
また、技能的には、各種検
定試験の受験者数と合格者数
が増加したという結果が得ら
れました。

② 指導工夫による効果

新しい教科である特設教科
に取り組むために、学習形態
や学習時間にも工夫をしてき
ました。

例えば、小学校の国際の学
習では、朝の十五分程度の時
間で英会話学習に取り組むこ
とや、外国人英語指導助手に
よる四十五分の学習を組み合
わせることで、子どもが継続
して学習できるようになりま



イングリッシュアドベンチャー

した。また、高校では、一つ
の授業で英会話とコンピュー
タを組み合わせ、毎日実施す
るなどの工夫も行いました。

③ 学んだことを実践するた めの豊かな体験

子どもたちが学んだ成果を
実践する場として、夏休みを
利用し、県内各地の外国人英
語指導助手と英語で交流する
「イングリッシュ・アドベン
チャー」に取り組みました。
また、高校二年生でのアメリ
カのロサンゼルスへ修学旅行
を実施してきました。

こうした体験をとおして、
子どもたちは、積極的に自分

から英語を話すことに大きな
自信を持ちました。

2 地域との結びつきを深め る教育活動を実践

① 「白い森学習」の取組に よる地域理解

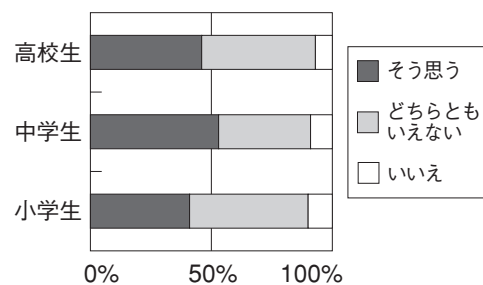
子どもたちが地域について
学ぶ機会として、総合的な学
習の時間を活用した「白い森
学習」を実施しました。

これは、小国町や自分たち
の住む地域を調べながら、課
題を設定しその解決方法を探
る学習です。

この学習を通じ、地域の人
たちとのふれあいの中で、自
然や文化に関する理解が深ま
り、子ども一人一人にふさと
を愛する心が育ってきました。
また、この学習の成果を発
表する場として、昨年十一月
に「白い森子ども議会」を開
催しました。

小学生から高校生までの子
どもたちが集まり、町づくりへ
の提言や、町の未来を話し合
う機会を設けたことにより、
地域の課題について真剣に考

地域行事に参加する子どもが増えた
と感じる（保護者）



える子どもが増えてきました。
さらに、この子ども議会で
は、高校生が主体となって企
画・運営を進めたことで、高
校生にはリーダーシップが、
小中学生には高校生に学ぼう
とする姿勢が育ってきました。

② 伝統行事など地域活動に 参加する子どもの増加

小中高一貫教育では、子ど
もたちが地域の活動に積極的
に参加する取り組みも行いま
した。「町民一斉清掃」「サマー
スポーツ大会」「白い森ふるさ
とまつり」「ウインタースポー
ツ大会」の四つの事業につい

では、中高生が実行委員として企画段階から関わり、各学校においても、生徒会が中心となって積極的な参加の呼びかけを行い、地域とのふれあい活動が展開されました。

こうした中高生の実行委員としての働きや、国民文化祭でのボランティアとしての活躍など、地域行事への参加意識の高まりは、「小中高一貫教育の成果」として町民の皆さんからも高い評価を得ています。

このほか、地域と学校が一体となって、毎月第三週を、積極的にあいさつを行う「あいさつ運動」実施週間として取り組みました。こうした運動は、着実に地域づくりへ浸透しています。

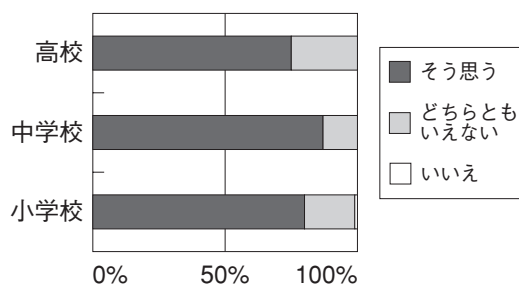
3 連携した教育の基盤となる「交流授業」「進路学習」「連携型入学試験」

① 「交流授業」における成果

小中高の連携教育の基盤のひとつに「交流授業」があります。

これは、高校の教師が小中

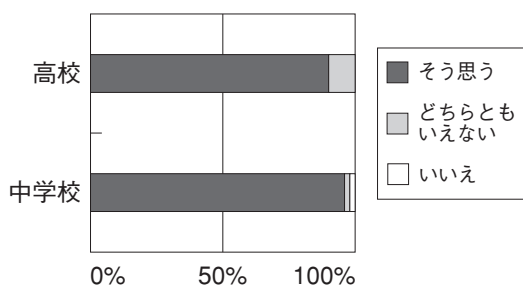
交流授業は子どもの意欲や関心を高めることにつながる（小中高教員）



学校に出向いて授業を行い、中学校の教師が高校や小学校で教えるという形式の授業です。今年度は、高校の教師が年間百五十回以上、小中学校で授業を行いました。

この「交流授業」によって子どもたちは、専門的な指導を受けることができるようになりました。中でも、陸上や水泳、音楽などの授業では、「わかりやすく教えてもらい、上手にできるようになった」という小中学生が多く、技術力の向上につながっています。「交流授業」のもう一つの大きな成果として、教員の指導

職場体験は進路選択をする上で貴重なことである。（中高生）



中学校と高校の連携教育では、簡便な入試や連携した指導体制により、ゆとりをもって将来の目的を定め、前向き

② 「進路学習」による成果

力の向上があります。多くの教員が、お互いの授業参観や小中高の異なった環境での指導経験を通して、一貫教育の指導内容や指導方法について研究を重ねてきました。また、いくつかの学校の子どもと一緒に授業を受ける「交流学習」など、多様な学習形態も試みてきました。

に生きようとする子どもを育成することができそうです。

そのためには、進路についての学習指導も必要です。今年度から小学校でも「生き方指導」として進路学習を実践し、夢や希望を持つて努力することの大切さを教えています。

また、昨年度から中学校・高校の職場体験学習を支援する「小国町小中高一貫教育進路学習協力会」が組織され、町内の企業や商店など約七十の事業所で構成する職場体験の受け入れ態勢が整備されました。これにより、小国町内の中学校の二年生全員が、それぞれの職場で体験学習を行うことができました。

③ 「連携型入学試験」

による成果

町が進めている連携型中高一貫教育の入学試験では、中高六年間のゆとりある教育を実現するために、一般入試によらず、面接試験を取り入れています。

この入試では、「白い森学習」

の発表や基本的な英語力を試す英会話による質疑応答など、これから求められる学力を基準にしています。

「白い森学習」の発表では、パソコンを駆使する生徒も多く、発表力や情報活用力が向上しています。英語で自分を表現することにより、日常の学習意欲を高め、自己表現力を高めていきます。

4 これからの小中高一貫教育と今後の課題

これまでの三年間の取り組みで、「連携型一貫教育」の成果と課題が、明らかになりました。

今後は、研究成果をもとに、小中高一貫教育を町の教育の基底に据え、次代を担う小国の子どもたちを育てていくこととしています。

① 特設教科「国際・情報」の一層の充実

小中高一貫教育の取り組みは、始めたばかりで、より充実



アメリカロサンゼルスへの修学旅行(小国高校)

したものにするには、まだ多くの課題が残されています。

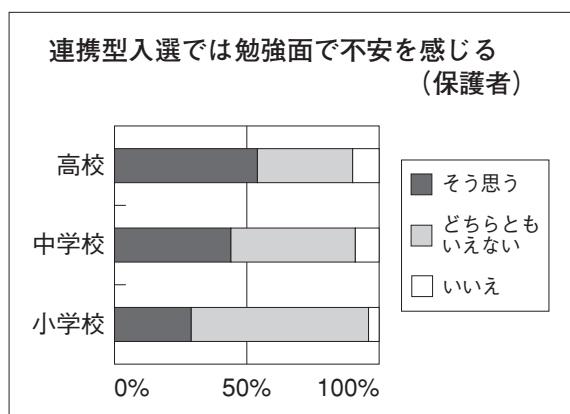
ひとつは、特設教科の「国際・情報」で使用する町独自の教科書を作成することです。この授業には、定められた教科書がないため、これまでの三年間で、どんなことを学習すればいいのかを研究し、授業の「目標」と「学習内容」を整理してきました。来年度は、わかりやすく使いやすい教科書づくりに取り組むことにしています。

もうひとつは、教職員の研修事業の充実です。特に、小学校の教師を中心に、英語の指導方法などを研修する機会を増やしていきます。

② 連携型入学試験と学力の向上

一貫教育は、ゆとりの中で、これから必要とされる学力を育成していくというものです。しかし、保護者には、一般入試としての学力試験がないことによる学力低下の不安もあるようです。

今後は、「白い森学習」や「国際・情報」を充実させ、質の高い発表力や表現力の育成を続けていきます。また、学力差が顕著に表れる教科を中心に、交流授業等を積極的に展開し、継続的な指導で基礎



学力を高めていきます。

そして、進路学習の充実強化により、「試験があるから勉強する」のではなく、「将来の目標に向かって、その実現のために勉強する」という子どもへの育成を目指していきます。

③ 小国高校への入学者数の増加

少子化が進み、町内の生徒数が年々減少する中、小国高校への進学者を確保することも大きな課題のひとつです。

現在の進学指導では、子どもが希望する学校へ進めるように指導することになっています。そのため、小国高校では、これまで取り組んできた一貫教育の研究成果を生かして、一層特色と魅力のある学校づくりを推進していくこととしています。

また、町では、引き続き一貫教育を推進するとともに、小国高校を核とする教育環境づくりと、小国町にふさわしい教育の在り方を研究していきます。

子どもの体験活動

支援サポーター

実践セミナー



子どもたちの生きる力、豊かな心を育むための体験活動を支援するサポーターを養成しようと、子どもの体験活動支援サポーター実践セミナーが、二月七日、おぐに開発総合センターで行われました。

当日は、町内より二十名が参加。講師に森林インストラクターの舟山功さん（松岡）、だがしや楽校の松田道雄さん（上山南中教諭）、片桐隆嗣さん（東北芸工大助教授）、らを迎え、レクレーションの実習や、体験活動プログラムづくりなどに取り組みました。

阿部陽子さん（小国中二年）

英語弁論大会で優勝



阿部陽子さん

小国中学校二年の阿部陽子さん（栄町）が、長井ロータリークラブ主催の英語弁論大会に出場し、見事、優勝の栄冠を手に入れました。

阿部さんは、課題文「クリスマスプレゼント」を正確な発音と会場を圧倒する見事な表現力で暗唱。阿部さんは「緊張しましたが、自分の力を十分に発揮することができました」と大会を振り返りました。

子育てサポーター

養成研修会



子育てサポーター養成研修会が二月十七日、健康管理センター行われました。これは、地域全体で子育てを支援しようと、今年度、初めて実施しました。講師に小国町家庭教育アドバイザーの加藤玲子さん（山辺町）を迎え、参加者がそれぞれの役割を演じて相談の受け方を演習するサイコプレイなどの研修が行われました。

講演の中で加藤さんは、子どもの命が危険にさらされていることを指摘し、虐待の早期発見を呼びかけました。

アルペンスキー教室

上手に滑れたかな？

アルペンスキー教室が、一月十七日から二月十九日まで、横根スキー場で開催されました。この教室は小学生を対象にスキーの基本技術を身につけようと、毎年開催されているものです。

参加を希望する方が多く、抽選で受講者を決定するほどの人気ぶり。参加者たちは、講師の方に熱心に指導してもらいながら楽しく練習に励んでいました。教室は土曜日コース（小学一～三年）、木曜日コース（小学四～六年）の二コースで実施され、あわせて三十六人が参加しました。



岸晃司君(小国中三年)

全中スキー出場



岸 晃司君

小国中学校三年の岸晃司君(小国町)が、二月三日から六

日まで新潟県妙高高原町で行われた全国中学校スキー大会に出場しました。岸君は、県大会を四位で通過し、全国大会の出場権を獲得しました。大会では、大回転と回転に出場。岸君は、「全国規模の大会には初出場でしたが、他の県の選手のスキーレベルや競技に臨む姿勢など勉強になる場所が多かったです」と大会を振り返りました。

丹勇一朗君(米沢工業二年)

廣川由香さん(仙台大学一年)

山形もがみ国体出場



丹勇一朗君



廣川由香さん

第59回国民体育大会冬季大会スキー競技会「山形もがみ国体」が、二月二十一日から二十四日まで開催され、小国町から二名の選手が出場しました。米沢工業高校二年の丹勇一朗君(白子沢)は、山形市の蔵王温泉スキー場で行われた少年男子複合競技に出場しました。また、仙台大学一年の廣川由香さん(あけぼの)は、最上町の赤倉温泉スキー場で行われた成年女子Aジャンプ・スラローム競技に出場しました。大会では、二人とも、山形県チームの一員として活躍されました。

小中高一貫便り



vol.21

地域に根ざした

高校を目指して

小中高一貫教育の大きな柱のひとつとして、「町づくり」に貢献できる生徒の育成」を挙げている。小国高校における具体的な取り組みの中から二つをここで紹介したい。

一、除雪ボランティア

本校における除雪ボランティアは二十年以上の歴史があり、今年度も去る二月四日に、一、二年生全員参加のもと実施された。何人かの方々から「とても一人では雪掃きが出来ないので、たいへん助かった」と、喜んでもらえた。また、除雪後に家でお茶をこ馳走になり、楽しく会話をしてきた班もあった。除雪だけでなく、このような地域の人々との触れ合いを持てたことも副次的効果として意義あることであった。

二、パソコン操作講習会

昨年度は本校単独で、今年度は町と共催で本講習会を実

施した。参加者の年齢層は小学生から七十代まで、また、コンピュータ操作能力も十人十色で、個別指導が不可欠な状況であった。そこで、平日は複数の本校職員が、週末は本校情報処理研究部の生徒がボランティアとして参加してくれた。職員・生徒共に地域の方々に満足してもらうため、前向きに協力してくれている。前回参加者のお一人から、研修会で学習したワードを用いて作成した「礼状」をいただいた。昨年四月のことである。それを見て、職員・生徒共に感激したことを、今思い返している。



パソコン操作講習会より

話題の ひろば

境内に響き渡る初笑い

山遊亭金太郎の寺子寄席

山遊亭金太郎の寺子寄席が、二月八日、田沢頭の盤昌寺で開かれました。落語による笑いをとおして、冬を元気に乗り切ろうと田沢頭自治会（伊藤孝太郎会長）が、今年初めて企画したものです。

当日は、地区の皆さんをはじめ、町内各地より約七十名が参加。山遊亭金太郎さんは、巧みな話術と表情豊かな表現で「時蕎麦」などの落語のほか



に、物まね芸の「百面相」を披露しました。会場となった盤昌寺境内には、終始笑い声がこだましていました。



この人に聞く

山形おきたま農業協同組合
小国地区代表支店長

小嶋克浩さん

このたび、JA山形おきたま小国地区代表支店長に就任された、小嶋克浩さん（小国小坂町）にお話を伺いました。

「食の安全や環境問題、新年度から新しい米政策が始まるなど、いま、農業は大きな転換期を迎えています。」

JAでは、地域の資源や特性を活かした産地づくりを進めています。平成十三年に新たな担い手として、JAが出資する農業生産法人「ジェイファームおぐに」を設立しました。遊休農地でのわらびやそばなど特産作物の栽培により、荒廃地の解消に努めています。魅力ある小国らしい農業を築くため農家の皆さんと一緒に頑張って頑張ります」と抱負を語ってくれました。

町長室から

小国町長 小野精一

近年、食の安全や安心、健康への関心が高まっており、スローフード、スローライフに象徴されるように、「食」の在り方、「食材」そのものを見直すという動きが広まっています。

上京の折、岩手県が主催していた「雑穀再発見フォーラム」に参加する機会に巡り会えました。本町からも雑穀の栽培に取り組んでいる農家の方々が参加していました。

フォーラムでは、「雑穀グルメ体験交流パーティ」も企画され、国際雑穀フォーラム代表の大谷ゆみこ氏が、雑穀料理を実演し、雑穀に秘められた魅力を語りかけました。

会場には約三百人の消費者が集い、三十種類にも及ぶ雑穀料理に舌鼓を打っていました。

15歳の誓い、力強く

小玉川小中学校で立志式

小玉川小中学校（向田宏男校長、児童生徒数二十名）の立志式が、二月二十日、行われました。これは、中学二年生を対象に毎年開かれているものです。

立志式は、昔の元服の儀式になり、自立して生きることの大切さを自覚してもらおうと実施されたものです。この日は、立志式を迎えた藤田梨紗さんが「自分の夢を叶えるため、一生懸命、努力します」と力強く決意を述べました。このほか、全校児童生徒がそれぞれ、将来の夢や今年の目標を発表しました。



町岩東地区、18年ぶりの年間総合優勝！

小国町ウィンタースポーツ大会

平成十五年度小国町ウィンタースポーツ大会が、二月二十二日、横根スキー場で行われました。

大会には、各地区より約六百人が参加。アルペン競技のほかに、そりりレーや瀬戸の渦潮など六競技に熱戦が繰り広げられました。激戦の結果、南部地区が優勝の栄冠を手にし、第二位に北部地区、三位に沖庭地区がそれぞれ入賞されました。ウィンタースポーツ大会終了後決定した、本年度の地区対抗総合成績は、町岩東地区体育協会が、十八年ぶりの総合優勝を飾りました。

白い森にこだまする津軽の響き

三味線奏者 山上 進の夕べ

三味線奏者山上進の夕べが二月十四日、白い森交流センター「りふれ」で開催されました。この催しは、おぐに白い森株式会社が主催したもので、山上さんは、平成十二年に続く二度目の公演となりました。

日本有数の津軽三味線奏者である山上さんは、「津軽じょんがら節」などの代表的な津軽民謡を三味線で披露。また公演の最中には、観客と一緒にねぷた囃子を競演するなどして、会場は大いに盛り上がりました。集まった約百四十名の皆さんは、見事なばかりさばきから奏でられる三味線の音色に酔いしれました。



白く森のほろろぐ

35

今月は、館商店店主今与志裕さんにお話をうかがいました。

「当店は、昭和の初期から中



今与志裕さん(中央)とお店の皆さん

央通りで酒屋として営業を始め、私が三代目になります。平成九年七月のアスモのオープンに伴い、テナントとして入店し、営業いたしております。私どもの店では、酒類全般の販売のほかに、写真の現像やクリーニングも承っております。

酒の販売では、小国ならではの地酒に力を入れ、各種ご贈答品も扱っています。生酒なども冷蔵の宅配便で全国発送が可能です。ご好評をいただいております。また、盆・暮れには、地酒を中心としたご

贈答品の特設コーナーを設けてたくさんの方をお待ちしております。電話一本で、町内全域に配達しておりますので、お気軽にお電話いただければと思います。

毎月初めにアスモ内で開かれる「ひふみ市」での売り出しのほかに、毎月第二日曜日には、Oカードのポイント三倍セールも行っています。このほか、毎日、お買い得商品を取り揃えて、皆様のお越しを従業員一同、心よりお待ちしております。上げております。

(☎61-0064)

編集後記

今月号の特集では、「地球温暖化問題を考えるシンポジウムin白く森」の様子を紹介しました。

電化製品のスイッチオフや車のアイドリングストップなど、身近な生活の中での取り組みは、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出抑制につながるということです。

大きな成功は、小さな一歩から始まると言われています。目先の便利さよりも、未来の安全のため、自分の何気ない「普段」を見直そうと感じました。(井上)

戸籍のまど

誕生おめでとございます。

緑町	佐藤	優	(正美)	樹穂
小渡	金	和希	(定順)	夫姫
沼沢	横山	凌成	(恭美)	治香
小国町	丹	友莉花	(学奈)	緒美
石滝	齋藤	星奈	(秀美)	智子
兵庫館	赤井	奈緒	(良美)	夫子
兵庫館	赤井	莉緒	(良美)	夫子
小国町	都築	柊人	(眞夕)	治香
岩井沢	寒河江	凜	(純夕)	子一
兵庫館	高野	瑚々亜	(洋晴)	子一

おくやみ申し上げます。

西	辻	本	克	巳	(42)
岩井	沢	羽	田	まさの	(95)
緑町	の	羽	田	文子	(70)
あけぼの	宮	遠	藤	浩次	(45)
大	里	舟	山	六郎	(79)
越中	崎	佐	藤	トミ	(97)
中田	山	渡	邊	太作	(88)
大	宮	那	須	シン	(93)
伊佐	領	野	ま	ん	(93)

人口のうき

人口	男	4,953人(-1)
	女	5,200人(+1)
	計	10,153人(±0)
世帯数		3,309世帯(-7)
		平成15年1月31日